

教員の養成に係る教育の質の向上に係る取り組み

常磐大学

- ・ 全学基本科目「学びの技法」による小集団によるディスカッション等のアクティブラーニングを活用し、自己教育力、思考力、判断力、表現力、他者と協調する人格育成を行っている。
- ・ 2013年度以降入学生対象の新カリキュラムにおいては、常磐大学教職課程委員会における教育実習履修基準の判定に際し、従来の教育実習の可否の判定に加え、実習校から実習の内諾を既に頂いているにもかかわらず実習を取り消す学生を減らすため、実習校の内諾取り付けの前(実習の1年前)にも、可否の判定を行うこととした。いずれもGPAを用いて判定を行うため、学生は常にGPAを意識して講義に臨むようになり、学生のモチベーションが向上した。
- ・ 「教職実践演習」開講に際して、教員免許状の取得に必要な科目の修得状況・成績・考察などの記録や、教職課程を履修する上での課題の達成状況等の記録を残す「履修カルテ」を導入し、教職課程における学びを自ら省察できる体制を整えた。また2015年度以降は、「履修カルテ」の改善を図り、介護等の体験・教育実習・ボランティアなどの学外活動についても記録でき、またセメスター毎の累計GPAのグラフを作成できるようにした。
- ・ 初等教育コースでは、2年生の秋に「小学校教育実習」として、算数科の指導案を作成し、一人10分程度担当の模擬授業に取り組み、3年生の春には、単独で30分の算数科模擬授業を行い、2週間の教育実習での授業に備えている。さらに、3年秋は、国語科模擬授業を、3人のリレー式で一人おおよそ10分間担当するプレの授業を3～10回近く繰り返し、本番の模擬授業に臨む。そして、4年春は、単独の国語科模擬授業を行ってから、2回目となる「教育実習」に2週間行く。これらの体験と研鑽をつみ、大学4年間では育むことが困難な実践的指導力育成に成功し、質の保証に大きく貢献している。
- ・ 「教職実践演習」は、教職を履修する中で不足している部分の補足を行うことも重要な役割の一つとして掲げ、「学級会活動」と「道徳の時間」の模擬授業を行うことを中心に据えている。
- ・ 2クラス開講の「教職実践演習」(小学校)は、開講曜日限をずらして開講し、公開模擬授業を原則としている。学科の2年生や3年生が自主的に参観したり、4年生で「教職実践演習」(小学校)のAクラスを履修している学生が、「教職実践演習」(小学校)のBクラスの授業を参観する姿が多く見受けられる。また、すべての模擬授業をビデオ撮影し、学生は、自分の行った「学級会活動」の模擬授業と「道徳の時間」の模擬授業のビデオデータを受け取り、発問、児童に扮する学生の発言、授業内容をすべて文字起こしし、分析し、最終的に、成果と課題を含め、2本のレポートとして提出している。この取り組みは、自分自身の授業を分析し、授業改善に取り組む習慣を身につけることにつながっている。
- ・ 「小学校教育実習」履修中の2年次秋と3年次秋に、外部の小学校で授業参観を行っている。良い指導者の授業を参観するため、「教職実践演習」(小学校)の授業参観は各自で公開授業研究会を調べ、自主的に参加し、内容をレポートにまとめ提出している。
- ・ 学内での学びを応用する場として、茨城県主催の「教師塾」への参加を推奨している
- ・ 全私教協・関私教協における教職課程情報を収集し、積極的に活用している。

常磐短期大学

- ・「造形表現」では、指導法として、画一化した方法論ではなく、発達段階に即した素材や道具を準備し幼児の表現活動が円滑に進むような環境を整える能力を身に付けることを重視している。具体的には、実際の制作活動を通して、技法や材料について学んでいく演習を行う。その際、グループワークを基本とし、学生個々の造形的資質に係わらず、互いに補い合いながら「素材の可能性や道具を使用する際の留意点」を理解できるよう、授業運営している。
- ・「器楽Ⅰ～Ⅳ」では、主に個人レッスン形態で授業を進めており、学生一人一人の課題や能力に合わせて丁寧な指導を行っている。
- ・「音楽の基礎」では、楽典、ソルフェージュ及び基本的なコード伴奏の習得を目指し、演習形式で授業を進めている。楽典、ソルフェージュでは、パワーポイントで作成したオリジナル教材を使用して、学生が視覚的、聴覚的に理解しやすい指導を行っている。また、コード伴奏では各人がピアノを弾き歌いするだけでなく、遊びや楽器を取り入れながら総合的な指導を行っている。
- ・「幼児音楽教育法」では、模擬保育を実施している。指導案作成、模擬保育実践、省察等を通じて、保育に役立つ音楽遊びのレパートリーを身に付ける。
- ・「臨床心理学」の授業では、小グループごとに、子どもに生じる問題について調べた内容を仲間の前で発表・説明するという課題を設定している。それにより、教員間で協同する能力と、保護者から質問・相談されたときに分かりやすく説明するスキルの育成を図っている。
- ・「保育社会学」の一コマでは、国際化の進展を意識した試みを行った。アメリカの姉妹校から来日中の交換留学生二人をティーチングアシスタントとして受け入れ、保育・幼児教育の制度、家庭の子育て観をテーマとして、英語（と日本語）で情報交換を行った。2016年度。（交換留学生との交流）
- ・「保育社会学」の授業では、アクティブラーニングの要素を取り入れた。自らテーマを設定し、調べ、プレゼンテーションを行い課題を明らかにした上で、批判的思考（クリティカルシンキング）の涵養をめざしディベートを行った。2015年度。
- ・「保育実習指導Ⅰ」の授業では、自身の学びの軌跡を可視化することの教育的効果で注目されるポートフォリオの導入をめざし取り組み中である。授業の中で課す様々なレポートをひとまとまりに綴じ繰り返し見返すことで、自身が重ねてきたこれまでの学習成果と課題を認識し、必要に応じて追加の学習を行うことで、実習における学びを最大限にすることが目的。2014年度より。
- ・「課題研究」の授業の中では、附属の幼稚園と連携したアクティブ・ラーニングを行った。幼稚園の実際の園庭と幼児の遊びを前提とした環境構成の指導を行っている。学生自身が考え、構成した環境が子どもたちの行動にどのような変化を与えるのか、確認し、改善し、さらに試行するという繰り返しの中で、子どもたちの気づきや学びに、学生自身が気づき、環境構成の意義を学んでいく。
- ・「幼児と健康」という授業において、保育現場で生じる問題など具体的なテーマによるグループワークを行い、自分の考えや他人の考えをディスカッションし、知識や考えの幅を広げる工夫を行っている。（演習授業の工夫）
- ・「幼児と運動」という授業において、学生が保育者役と子供役に分かれ、学生自身が考えた運動に関する授業を実施することで、保育の実際を考えられる工夫を行っている。（模擬授業の実施）
- ・「幼児と運動」の模擬授業の発展として、「課題研究」という授業において、常磐大学幼稚園にて学生が実際に子どもに運動指導を行える機会を設け、実践とそれを省みる授業を実施している。（実践授業の取り入れ）

- ・「国語」の授業で、「江戸いろはかるた」の暗記や、御伽草子『文正草子』・『歎異抄』等地域に根差した伝統的文学についての理解を深める取り組みを行っている。これにより、「幼稚園教育要領」に言う「地域の実態」に即して、幼稚園教育と小学校以降の「伝統的な言語文化」領域教育へのスムーズな接続を可能にするための教育力が身につくようにしている。
- ・「児童文学」の授業では、班単位・個人単位両面での読解・討論・発表の取り組みを通じて、自他の意見の共有・洗練・表明を行う経験を積ませている。これにより個性を生かしつつ、自他の経験をより多くの人々に共感可能なものとして引き出す教育能力を身につけさせるようにしている。
- ・「児童文化」の授業を通じて児童演劇の制作を行う取り組みを行っている。これにより幼児教育における具体的な実践能力を高めつつ、教育現場における集団運営を模擬的に体験させノウハウを習得させるとともに、児童文化を知識のみならず経験を通じて理解できるようにしている。
- ・「乳児保育」「幼児の言葉」の授業では、DVD視聴する際には、DVDから得た内容を書き込む穴埋め式の資料を作成・配布し、DVDからの情報を注意して得られるようにする。
また、スライドを写し取る時間を省略するために、ノート代わりの資料を用意し、必要事項を書き込めるようにする。さらに、授業の初めに、前回の内容を一問一答式で確認し、理解を確実にできるようにする。一人一人のポストレクチャーに目を通し、内容に関するコメントはもちろんのこと、誤字脱字のチェックをすることで、語彙力、漢字力を高めていけるようにしている。
- ・「保育指導法」の授業では、幼児期にふさわしい生活を理解し、環境の構成や援助について学び、実際の場で活かせる指導計画の作成ができるようにしている。指導計画の作成における重要な視点を伝え、学生が自分の指導計画を自分で見直し、自ら修正をするということを積み重ねることで、より幼児の生活が豊かになる指導計画の作成ができるように工夫している。